

者の腕を切つて、死体をその場に埋め、腕を火葬し遺骨にし、戦闘中白布で包んで、小隊毎に持つて、戦つたり行軍したりした。

二回の戦闘で、中隊の戦力がなくなつて、大隊本部の所へ夜中帰つたが、敵とさらに遭遇し山の中へ入り、その後、隊は戦闘能力を無くして朝を待つたら、旅団から連絡が来た。それまでは、皆自爆を覚悟して手榴弾の栓を抜いていた。

險山廟（ニヤンニヤン山と称した）の戦闘は大軍に出会い、そこから退却して、黄河の曲がり角、潼関の西へ行き、西安までで行けなかつた。その後は上海付近に移つて、終戦を迎え、昭和二十一年一月二十一日帰国した。

勝 部 隊 河南作戦で負傷

岩手県 湯 上 弘

―湯上さんも郷土部隊の弘前師団編成の勝兵団との

ことですが、やはり北支方面でしたか。

私は大正十年一月六日、現在の岩手県江刺市で生れましたから、昭和十六年徴集第一補充兵でした。昭和十七年四月に盛岡補充部隊へ教育召集を受け、十月に解除になった。

ところが、翌月再召集、勝部隊要員で、十日ぐらいいて、朝鮮經由で北支の洪洞の部隊に入りました。勝五二二八部隊（独立混成第十六旅団第六十九師団）独立歩兵第一一九大隊へ転属となつたのです。私は大隊砲隊に配属されて、大行作戦に直ぐ参加ですが、途中襲撃を受け、一〇人ぐらい戦死しました。

沁源に大隊本部があり、大隊長は赤星中佐だった。昭和十八年の正月までそこにいて砲監視をやつた。何しろ八路军の真只中だったので、抗日や厭戦ビラがどんどん撒かれた。その後は沁源の下流の降馬鎮で下車し、沁水に部隊本部が移つた。

その頃、部隊から二名が支那語（漢語）教育に選抜され、大原の司令部（第一軍）に行つた。北支方面軍の各部隊から各二名、半年間の教育です。午前中は各

個教練、午後支那語教育を受けていたのですが、第三十六師団（雪部隊）が南方へ行くことになり、各部隊の警備地区が変更のため支那語教育は中止、私たちは原隊復帰した。大隊本部は臨汾から東へ入った所に移動しました。

—支那語教育はどういうことをやるのですか、各軍でも、素質のある者を集合教育やっていたのですか。

正式には漢語教育というので、感じたことは、二ヵ月やってテストする。合格しないと「成績不良につき部隊復帰を命ずる」と部隊長宛にくる。これは不名誉なことなので、二ヵ月間は寝ないでやった。とにかく頑張り、合格し、ようやく残ってホッとした。

三ヵ月間、午前勉強、午後実習会話のため外出し、実習会話の報告書を提出しなければならぬ。隊を組んで二〇人ぐらいで一個小隊として外出する。班内は六人部屋で生活するのだが、外出は一緒に出て、実習が終わればまた集まって営門に入る。四時頃帰るのだが、途中遊んでいられない。露天商や、通りすがり

の人と軍服を着たまま話をする。

こちらは正式の北京漢語で話すのだが、中国人でも教育を受けた人とは、どうやら通じるのだが、一般人は土語（地方語）が多いからなかなか通じない。北支はほとんど城壁がある（無いのは石家荘だけか）。

各部落は自分で守るわけで、村々で言葉は違う。城内と城外とは通じにくいし、土語がある。農夫や人夫などは正式な北京漢語は通じない。

日本人や兵隊の作った支那語とは全然違う。中国人は逆に日本語だと思っている人が多かったようです。前にも言ったように半年後、第三十六師団移動で漢語教育隊は解散した。

討伐で歩いてみると、はじめは通訳は朝鮮の人が多く、彼等の行動は日本人には判らなかつた。そのうち、兵隊に漢語教育をしなければならぬとなつた。

復帰後、私は中隊の指揮班で通訳となり、各部落で教育を受けた村民と字を書いて話すとはつきり判るようになった。話は通じなくとも筆談で通じ、「大人」と尊敬されるようになった。村公所（村役場）で話し

たりして、住民は協力的だった。

その後「ヨ号作戦」などあり、一個所へ一ヵ月も駐屯せず、移動、移動の連続でした。そのため部族は日本軍より中共八路軍にねらわれる。鍋釜まで持つていかれた部落が多いので、むしろ日本軍に対しては好意的だった。以前の朝鮮人通訳の中には金目の物を没収する者があつたという。

―それでは、その後の河南作戦のことをうかがいましょう。

河南作戦は、昭和十九年春からです。山西省の南、運城の東、黄河のそば垣曲の近くで暫く警備をしていて、作戦で黄河を渡河した。大隊砲を分解搬送するのだが、黄河は砂地で膝まで入る。夕方から夜にかけて渡るのだが、河の向う側（河南省）も砂地で台上にトーチカがある。四〇度ぐらいの傾斜を砲を分解して登る。援護小隊がついたが、砲弾も背負って登るつらさ。ようやく台上のトーチカの近くに着くと、五〇メートル先に敵がいるので大隊砲を曲射で射たねばならない。間違えば自分の所に弾が落ちる。そこを占領して

河南作戦出發です。繩（べん）池へ十日間、そこに金斗山という敵陣地があり、その戦闘は物凄かった。坊主山にトーチカがあり、これを陥さないと（その時部隊は師団の前衛）というので、連隊砲二門、大隊砲四門、援護射撃を朝から晩までする。小銃隊が匍匐で行くと手榴弾でやられ、また次の隊が行く。見ていると戦死する者が多い。

夜、雨が降り、敵が来るかと歩兵砲隊も小銃で警備した。その後東方の新安へ行き洛陽攻撃となったのだが、他の方から来た兵団が洛陽を陥落させた。洛陽攻撃を終え、新安から逆戻りした、北岩家の戦いでは部隊はかなり苦労した。第三梅原中隊長戦死、機関銃の大竹少尉戦死など、沢山の戦死者が出た。

その頃、空襲が激しくなり、昼間は歩くことが出来ず、夜のみの行軍となる。擬装して夕方から早朝行動した。靈宝山の頂上から見ると、汾河を境にした台上に敵が一杯いる。そこを攻撃するので山砲、大隊砲が援護射撃する。第二段の台上まで歩兵が登ったので、砲が降りていった時、逆に敵の山砲の砲撃を受けた。こ

ちらは砲を駄載しているので射撃することが出来ない、そのうち、第一発がヒューンと二〇メートル後方に弾着、第二発第三発が二〇メートル左右弾着、第四発目を射ったので今度危ないと思った瞬間、ドカンと破裂しアッと思ったら私は気を失ってしまった。

弾が落ちた所は一、二メートル近く、地隙の所で破裂したので私は両下肢をやられ肉を取られ、破片が入った。やられた瞬間は、気持ちよくポーツとなつて、全身骨が無くなりフニャッと気持ちよくなり気を失ってしまった。

気が付いたら、両そけい部を止血してあつた。軍医が近くにいたので、直ぐガスエソの注射をして貰つて良かった。その時、巻脚絆の所から血が一メートルも吹いていたという。そのため血がなかなか止まらず、止血帯を一日以上していた。

戦闘が終わり、衛生兵に野戦病院へ連れていってもらうのに、担架が出来ず、道も狭く、ロバに乗せられた。痛くてあぶみに足はかけられず、降りることも出来ない。誰にも手伝ってもらえない。作戦をやりなが

らのことで三日間は本当につらかつた。

三日目、ようやく最前線の野戦病院に着いた。食べたり飲んだりすると嘔吐してしまう。夜は休めても昼はロバから降りられないから、野戦病院に入り、ミルクを二、三杯ぐらい飲んだ時、あれぐらい美味しいものはなかつた。

そこに一週間ぐらいいて、運城の陸軍病院護送となつたが負傷者が一ぱい。運城の手前の野戦病院は五〇〇人以上で、治療は一日一度ぐらい。暑いので負傷患者に蛆がわく。輜重隊の帰りの車に乗せられたが、渡河は杖にすがつて、ようやく渡り運城に着いた。しかし病院は満員で廊下にアンペラを敷いていた。その後、大原へ行って助かつた。次から次へと負傷者が来る。大原陸軍病院は本式の病院で一カ月。

次に護送されたのは北京の第二陸軍病院で、三、四カ月いた。そこは完全看護で良かった。最初の負傷の時、胃がすっかり弱って何を食べても栄養が採れない。中国人の手伝いに大根を一本持つて来てもらい、生大根を毎日一週間続けて食べたためか、下痢が癒つ

た。それまでは傷がなおらなかったのに。

私は今まで大根を生で食べるが、ジャスターゼは大したもの、石家莊へ前送、傷は癒り切っていないのにそこでも一ヵ月ぐらい。傷がふさがらないうち、石門で中隊復帰を命ぜられた。

帰る時は一人で帰るので、鉄道沿線を運城へ帰ったが、部隊は陝西省南和村にいたので復帰した。それから後は師団は中支の第十三軍に編入するため南下した。大原、西門、津浦線で南京、上海、呉淞と、米軍の大陸上陸阻止のためだった。これは、五月に、勝部隊が北支方面軍から第十三軍に転属が発令されたためでした。